

資料

原因帰属尺度構成に関する研究

金子 智 栄 子*

問題と目的

個人が自分にとって強化ともいえる事象の原因を考えると、客観的原因とは別に主観的原因の認識の仕方が関わりをもつ。そして強化の受け手が、その強化を何と随伴したものとして認識するかが、行動の生起可能性の増減を決定する大きな役割を演じると考えられる。Rotter (1966) は統制の位置という概念を提唱し、内的-外的統制を一次元上でとらえた人格変数の連続体と考えて I-E scale を作成した。そして、外界に対し自己に制御力があると認知する内的統制型の者ほど、達成行動にすぐれ社会政治的活動に活発であるという研究結果が一応得られてはいるものの、有意な関係がみられない、逆に外的な傾向をもつ者ほど有意な正の相関をもつといった結果もみられる。最近、Rotter の I-E scale についての因子分析的研究がなされ、I-E scale の領域の多次元性を示す因子が得られ、それらの因子を考慮することにより行動の予測性が高まるといった結果も得られている (Gurin ら, 1969 : Levenson, 1973, 1974)。また Collins (1974) のように、統制性と帰属性を示し、統制の位置の概念自体の多次元性を指摘した研究もある。

このように統制の位置の問題点が指摘される中で、達成動機研究の流れから Weiner (1972) は、Heider (1958) の理論を発展させて統制の位置の次元に安定性の次元を加えて原因帰属理論をとらえた。Weiner は課題達成場面の成功、失敗の主要な原因として、能力(A) [内的, 安定], 努力(E) [内的, 不安定], 課題の困難度(T) [外的, 安定], 運(L) [外的, 不安定] の4要因をあげた。Weiner は統制の位置の次元が感情変動に、安定性の次元が期待変動に影響すると考えており、統制の位置が期待変動に影響を与えるとする Rotter の説と異なる。さらに、Weiner (1980) は援助行動を導く手がかりとしての感情反応に、前述の2次元の他に制御可能性 (Controllable)

の次元が関係するとしている。そして米国と同様にわが国でも、原因を内的で不安定な努力要因と考えることにより学習への意欲が高まることが定説になっており、努力帰属の重要性が強調されている (稲垣, 1980 : 速水, 1981)。

そこで、Rotter が人格変数としてとらえた統制の位置の概念に、Weiner の原因帰属理論を導入し、一般的態度としての原因帰属を測定する尺度を作成することを試みることにした。本研究では原因帰属尺度構成の前段階として、positive(P)事態と negative(N)事態の様々な課題場面での因子分析の結果について、統制の位置の次元および安定性の次元を考慮しながら考察する。P事態とN事態に分けたのは、成功事象と失敗事象の責任のとり方で予測される行動が異なるという研究報告 (Crandall ら, 1965 : Mischel ら, 1974) があるためである。

方 法

質問紙の作成 Rotter は、達成、愛情、一般の社会政治的態度のような領域に基づいて I-E scale の項目を作成した。Weiner は、課題達成における実験の場面から4要因を抽出した。本研究では、5 (課題場面) × 2 (P事態, N事態) × 4 (原因帰属要因) の観点を含む項目を各3～6項目ずつもうけた。質問項目作成にあたっては、Bialer (1961), Crandall ら (1965), Nowicki & Strickland (1973) などを参考にした。主に生徒の学校と家庭生活を課題場面別に以下のような5つのカテゴリーに分けた。

- ①達成に関するもの (i 学業成績, ii ゲーム, iii 運動)
- ②対人関係 (i 親, ii 友人, iii 教師, iv 一般的対人関係)
- ③自己に関するもの
- ④学級課外活動に関するもの
- ⑤一般的期待

P事態とN事態の内容の質問を各場面の下位領域につき3題ずつもうけた。ただし、カテゴリー① i 学業成績は6題ずつにしたので総質問数は66題となった。P事態と

* 植草幼児教育専門学校

TABLE 1 精選された項目についての因子分析

事態	カテゴリー	M	SD	NO.	質 問 項 目	予想した原因	FACTORS			
							I	II	III	
P	①iii	1.82	.78	72	私がサッカーでシュートをきめた	ゴールキーパーがへただから	T	.60	.03	.16
P	④	1.88	.88	253	私が日直の仕事をいっしょうけんめいにやる	気がむいたから	L	.57	-.17	-.01
P	③	2.17	.80	175	私が自分のあやまちを認めることができた	ちょっとしたあやまちだったから	T	.56	.01	.02
P	②ii	1.95	.83	211	皆が私と遊びたがる	人数が足りなかったから	L	.56	-.26	.18
N	①i	2.04	.73	150	私が学校のテストで良くできなかった	テストの問題が特にむずかしかったから	T	.53	.21	-.03
N	②iv	2.09	.81	242	私が人からきらわれる	たまたまその人とは気があわないから	L	.53	.19	-.09
P	④	1.94	.74	116	班長になれた	私が信頼されるような行動をしているから	E	-.17	.63	.03
P	④	1.86	.78	114	班長になれた	私にみんなをまとめていく力があるから	A	-.16	.61	-.03
P	④	1.95	.78	196	私がバレーボールの試合の選手に選ばれた	私がうまいから	A	.25	.53	-.21
P	②ii	2.23	.73	210	皆が私と遊びたがる	私が他の人のことも考えて遊ぶから	E	-.12	.51	.20
P	②iv	1.84	.69	81	私が良い人にめぐりあえる	私の性格が良いから	A	.26	.50	-.04
P	①iii	1.87	.80	221	なわとびで連続二重回しをたくさんできた	私の運動神経が良いから	A	.35	.50	-.18
P	④	1.86	.78	254	私が日直の仕事をいっしょうけんめいにやる	私がまじめな性格だから	A	.00	.50	.21
N	①iii	1.87	.80	153	私が野球で三振してしまった	私の運動神経がにぶいから	A	.16	-.16	.54
N	②iv	1.95	.83	86	私がひとりぼっちでほっておかれる	私がまわりの人とうまく話せないから	A	.08	-.02	.51
N	①iii	2.05	.85	33	鉄棒の前回りが連続してできなかった	私の運動神経がにぶいから	A	.02	-.21	.51
N	①iii	1.95	.78	182	ドッジボールでボールをあてられてアウトになった	私の運動神経がにぶいから	A	.12	-.21	.49
N	①i	2.04	.75	26	授業でわからないことがある	私に理解する力がないから	A	.15	.01	.45
N	④	2.61	.71	157	園芸係なのに花だんの水まきをさぼってしまった	きちんとやろうという気がなかったから	E	-.05	.11	.44
N	④	2.14	.72	163	私が立候補してもクラス委員に選ばれなかった	私が信頼されるような行動をしていないから	E	.00	.20	.43
CONTRIBUTIONS -----							10.99	7.67	5.68	
%							-----	26.42	18.19	13.67

TABLE 2 Positive 事態の因子分析

カテゴリー りー	M	SD	NO.	質 問 項 目	予想した原因	FACTORS			
						I	II	III	
①i	2.33	.78	215	私が学校の宿題をはやくすませることができた	先生が簡単な問題ばかり出したから	T	.68	-.04	.12
①iii	1.82	.78	72	私がサッカーでシュートをきめた	ゴールキーパーがへただから	T	.59	-.13	.24
①i	2.40	.74	191	私が授業中きいたことを覚えている	覚えやすい内容だったから	T	.58	.15	-.02
④	2.08	.86	193	私がバレーボールの試合の選手に選ばれた	他に出る人がいなかったから	L	.58	-.09	-.04
①ii	2.45	.73	260	私がすぐにパズルを解くことができた	前に同じようなパズルをやったことがあるから	L	.58	.10	.06
①ii	2.50	.71	259	私がすぐにパズルを解くことができた	そのパズルがあまりむずかしくなかったから	T	.56	.03	.04
②i	1.86	.84	98	おとうさんがほめる	たまたまおとうさんのきげんがよかったから	L	.53	-.33	.01
①i	2.80	.53	213	学校の宿題をはやくすませることができた	私がいっしょうけんめいにやったから	E	-.07	.65	.04
②iii	2.72	.54	130	先生が「良くできたね」と言った	私ががんばってやったから	E	-.13	.61	.08
①i	2.86	.44	186	前よりも通信簿の成績が上がった	私が前よりもいっしょうけんめいに勉強したから	E	-.14	.57	.10
②i	2.39	.74	100	おとうさんがほめる	私が良いことをしようと努力しているから	E	-.19	.56	-.07
②iii	2.29	.70	207	先生が用事を頼む	私がきちんとやるようにしているから	E	-.07	.56	.13
①iii	1.87	.80	221	なわとびで連続二重回しをたくさんできた	私の運動神経が良いから	A	.05	.04	.65
④	1.85	.78	196	私がバレーボールの試合の選手に選ばれた	私がうまいから	A	-.00	.13	.63
①iii	1.74	.73	14	野球でホームランを打った	私の運動神経がいいから	A	.09	-.04	.60
①iii	1.73	.73	71	私がサッカーでシュートを決めた	運動神経がいいから	A	-.01	-.13	.60
①i	1.48	.61	214	学校の宿題をはやくすませることができた	私の頭が良いから	A	.11	.08	.58
②iv	1.69	.71	238	私が人の意見を変えることができた	私には人を従わせる力があるから	A	.03	.08	.57
②iv	2.02	.70	169	私が人から親切にされる	私の性格が良いから	A	.07	.05	.56
CONTRIBUTIONS -----						12.28	9.77	9.59	
%						-----	23.42	18.62	18.15

CONTRIBUTIONS

P事態では第5因子まで得られた。各因子の寄与率は第1因子から順次、27.01%，21.90%，11.42%，5.15%，4.46%で、第5因子までで全分散の69.94%を説明していた。第1因子の寄与率が大きいということではなかった。第3因子まで、第4因子まで、第5因子までのそれぞれの因子構造につきバリマックス回転解を求めてみたところ、第3因子までの回転解がもっとも単純構造をなしていたので、第1から第3因子までのバリマックス解を採用した。P事態の高負荷の項目については、TABLE 2に示す。第3因子までで全分散の60.19%が説明されてい

た。N事態では第8因子まで得られた。各因子の寄与率は第1因子から順次、24.71%, 17.10%, 9.21%, 6.71%, 5.12%, 4.91%, 4.59%, 4.29%で、第8因子までで全分散の76.63%を説明していた。第1因子の寄与率が大きいということではなかった。第3因子までから第8因子までのそれぞれの因子構造につきバリマックス回転解を求めてみたところ、第7因子までについての回転解がもっとも単純構造をなしていたので、第1から第7因子までのバリマックス解を採用した。N事態の高負荷の項目については、TABLE3に示す。第7因子までで全分散の72.35%が説明されていた。

P事態およびN事態とも、第1因子に「外的帰属」、第2因子に「努力」、第3因子に「能力」と考えられる因子が得られた。N事態では第4因子以降命名不能となった。「外的帰属」にRotterのいう外的統制があらわれたと考えるならば、安定性の次元、すなわち安定と不安定とに分かれなかったことになる。Weinerは実験的場面から4要因を抽出した。しかし本研究では課題内容が質問紙によりあらわされており、実際に課題を遂行させたのではなかったもので、課題が具体性にかけていたといえる。そのために安定性の次元に分かれなかったのかもしれない。「努力」の因子と「能力」の因子をPN事態別に外界の制御可能性の側面から考察すると、P事態の「努力」と「能力」、N事態の「努力」は外界の制御が可能となり、N事態の「能力」は制御不可能となる。前者に帰属すればのちの行動の生起可能性は増大し、後者に帰属すれば行動の生起可能性は減少すると考えられる。しかし、努力がどの程度の不安定性をもつか(稲垣ら, 1981)、能力がどの程度の安定性をもつか(速水ら, 1981)は今後問題とされるところであろう。

次に統制の位置の次元、安定性の次元がどのような関係にあるのかを調べるために、得られた各因子の関連を調べることにした。RotterはP事態とN事態の区別をしていないので、Rotterの説に基づくとP事態とN事態の異なる事態間で「外的」同士、「努力」同士、「能力」同士が正の相関をもつことになる。また内的な傾向をもつものとして「努力」×「能力」が正の相関をもち、内的・外的の相反する関係において「外的」×「努力」、「外的」×「能力」が負の相関をもつと考えられる。

そこでP事態、N事態の両因子構造において一定量以上の因子負荷をもつ項目を選び^{*}、個人別に各因子ごと

^{*} P事態は.393以上の負荷量をもつ項目を選んだのでその数は「外的帰属」が36、「努力」が24、「能力」が21項目となった。N事態では.353以上の負荷量をもつ項目を選んだので「外的帰属」が36、「努力」が18、「能力」が10項目となった。

TABLE 4 同一事態における2因子間の相関係数

因子 \ 事態	P	N
「外的」×「努力」	-.17*	-.15*
「外的」×「能力」	.29**	.27**
「努力」×「能力」	.24*	.24*

TABLE 5 異なる事態における2因子間の相関係数

P事態の因子 × N事態の因子	r
「外的」×「外的」	.66***
「外的」×「努力」	.05
「外的」×「能力」	.45***
「努力」×「外的」	-.10
「努力」×「努力」	.55***
「努力」×「能力」	-.09
「能力」×「外的」	.61***
「能力」×「努力」	.01
「能力」×「能力」	.08

*...P<.05水準 **...P<.01水準 ***P<.001水準

の項目の評価得点の総合を算出した。同一事態における2因子間の相関をTABLE4に示し、P事態とN事態の異なる事態における2因子間の相関をTABLE5に示す。

TABLE4より、「外的」×「努力」という外的帰属と内的帰属の関係に有意な負の相関がみられた。「努力」×「能力」という内的帰属同士は正の有意な相関がみられる。好ましいことがおこるのはある程度の能力とそれを発揮しう努力が必要なのであり、否定的なことがおこるのは能力不足と努力不足の両方が関係していると考えているのであろう。能力と努力の相互作用を理解しているといえる。一方、「外的」×「能力」に高い正の相関がみられたが、それは、好ましいことがおこるのは内的要因である自分の能力と外的状況が適合したからであり、否定的なことがおこるのは自分の技能と外的状況とが不適合だったからと考える傾向があるからなのかもしれない。内的要因と外的状況の両方の関係を認識しているとも考えられる。

TABLE5より、「外的」同士、「努力」同士に非常に高い相関がある。外的帰属主義傾向、努力主義傾向のあらわれと考えられる。P事態の「外的」×N事態の「能力」、P事態の「能力」×N事態の「外的」に非常に高い相関

がみられた。前者は自尊心の低さをあらわし、後者は自尊心の高さをあらわしていると考えられる。これは、すでに自分の能力に対する自己評価ができており、それにあわせて外的要因に帰属しているためであろう。

以上により、Rotter は P 事態と N 事態の区別をせず内的-外的統制を論じているが、P 事態と N 事態とでは内的帰属の仕方が異なることがわかった。特に「能力」への帰属には自尊心の高低が作用し、自己の能力評価にあわせて異なる事態で外的にも帰属していると考えられ、事態をこえて「能力」に帰属する傾向がないことが明らかになった。「努力」の因子と「能力」の因子とが得られたことにより、自己に関しては Weiner のいうように不安定と安定とに分けて考えるのであろう。Rotter は外界の制御可能性からも内的-外的統制を論じているが、N 事態の能力帰属は内的帰属であっても制御不可能となる。Rotter の考える統制の位置の次元には、制御不可能な内的帰属の要因が含まれており、それが行動の予測性を低下させているとも考えられる。一般的態度として努力主義の傾向があることがわかった。米国と違い、わが国でいわれる努力には安定的要素が含まれていると考えられる。努力の不安定性について今後特に検討されなければならないであろう。また、課題を具体的にするためには、樋口ら (1981) のように、ある程度限定された課題領域における原因帰属について調べる必要があるだろう。

要 約

Weiner の原因帰属理論の立場から 5 (課題場面) × 2 (P 事態, N 事態) × 4 (原因帰属要因) の観点を含む原因帰属の項目を作成し、中学 2 年生に 3 段階の Likert 法で評定させ、P 事態と N 事態の様々な課題場面での原因帰属の様相を調べた。

因子分析の結果、P 事態と N 事態とでは内的帰属の仕方が異なり、両事態ともに「外的帰属」、「努力」、「能力」と考えられる 3 因子が設定されることが明らかになった。内的-外的、安定-不安定の関係を調べるために 2 因子間の相関を求めてみたところ、同一事態内においては「外的」×「能力」に正の相関がみられ、外的状況と能力の適合、不適合が結果に影響すると考える傾向があることが見出された。異なる事態間においては、P 事態の「外的」× N 事態の「能力」、P 事態の「能力」× N 事態の「外的」に非常に高い正の相関があり、前者は自尊心の低さを、後者は自尊心の高さをあらわしていると考えられた。

引 用 文 献

- Bialer, I. 1961 Conceptualization of success and failure in mentally retarded and normal children. *Journal of Personality*, 29, 303-320.
- Collins, B. E. 1974 Four components of the Rotter I-E scale: Belief in a difficult world, a just world, a predictive world, and a politically responsive world. *Journal of Personality and Social Psychology*, 29, 381-391.
- Crandall, V. C., Katkovsky, W., and Crandall, V. J. 1965 Children's beliefs in their own control of reinforcements in intellectual-academic achievement situation. *Child Development*, 36, 91-109.
- Gurin, P., Gurin, G., Lao, R. C., and Beattie, M. 1969 Internal-external control in the motivational dynamic of Negro Youth. *Journal of Social Issues*, 25, 29-53.
- 速水敏彦 1981 学業成績の原因帰属 オーバーアチーバーとアンダーアチーバーに関連して 教育心理学研究, 29, 1, 80-83.
- 速水敏彦・三宅正夫 1981 学業成績の原因帰属 教心 23回総会発表論文集, 162-163.
- Heider, F. 1958 *The Psychology of interpersonal relations*. John Wiley & Sons
- 樋口一辰・清水直治・鎌原雅彦 1979 Locus of Control に関する文献的研究. 東京工業大学人文論叢書, 95-132.
- 樋口一辰・鎌原雅彦・大塚雄作・清水直治 1981 児童の原因帰属に関する研究-原因帰属個人差測定質問紙の作成と内容の検討- 教心23回総合発表論文集, 550-551.
- 稲垣佳世子 1980 自己学習における動機づけ 波多野 誼余夫編 自己学習能力を育てる 東京大学出版会, 33-95.
- 稲垣佳世子・波多野 誼余夫 1981 連続失敗に対する反応の個人差 教心23回総会発表論文集, 164-165.
- Levenson, H. 1973 Multidimensional locus of control in psychiatric patient. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 41, 397-404.
- Levenson, H. 1974 Activism and Powerful Others: Distinctions within the concept of internal-external control. *Journal of Personality Assessment*, 38, 377-383.
- Mireles, H. L. 1970 Dimension of internal versus external control. *Journal of Consulting and Cli-*

- nical Psychology*, 34, 226-228.
- Mischel, W., Zeiss, R., and Zeiss, A. 1974 Internal-external control and persistence : validation and implications of the Stanford preschool internal-external scale. *Journal of Personality and Social Psychology*, 20, 265-278.
- Nowicki, S., and Strickland, R. 1973 A locus of control scale for children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 40, 148-154.
- Rotter, J. B. 1966 Generalized expectancies for internal vs. external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, 80 (Whole No. 609), 1-28.
- Weiner, B. 1972 Theories of motivation : From mechanism to cognition. Rand McNally
- Weiner, B. 1980 The Role of Affect in Rational (Attributional) Approaches to Human Motivation. *Educational Researcher*, July-August, 4-11.

〈付記〉

この研究は、千葉大学の昭和54年度教育心理学特殊演習において、西澤博子と筆者がはじめたもので、本論文は日本女子大学における筆者の修士論文の1部を改訂したものである。御指導下さいました、日本女子大学家政学部の宮本美沙子教授、千葉大学教育学部の三浦香苗助教授に感謝いたします。東京大学（当時）の塗師斌先生には、データの分析に際して御示唆をいただき、記して感謝致します。御協力下さいました被検者の皆様にもお礼を申し上げます。 (1982年6月4日受稿)